
My supple mind

マキアート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

My supplement mind

【Nコード】

N8013B

【作者名】

マキアート

【あらすじ】

恋愛においてあるコンプレックスを持った主人公が大学に入った直後に出合った一人の男性によって、今までに感じたことのない感情が生まれ、傷つき傷つけながら自分というものの価値・存在について考えるようになる。恋愛とは？恋とは？女性ではなく女の子の目線で書いた小説です。

第1話 出会い

「なんかしゃべれよ。」

せつかく時間作ってんやから」

ぶっきらぼうに慎太郎が言った。

それは2週間ぶりに扱ぎ付けた念願のデートの車中での会話だった。

「そだね。久しぶりに会えたのにしゃべらないと

時間が勿体ないよね。」

私は必死に言葉を発した。

運転する彼の顔をチラッと見る。

それだけで私は胸が熱くなり頭が真っ白になって言葉が出なくなってしまう。

彼に出会って3ヶ月。

私のプライドも心も傷だらけになっていた。

残ったのは彼を好きというどうしようもない気持ちだけ…。

彼に出会ったのは大学生になった最初の日曜日。

友達になった由美と興味本意で行った新歓コンパだった。

いったいどれくらいの人が来ているのか分からないほどの店内。

大音量の音楽が流れ暗い店の中にいくつもの水槽が置かれて怪しい光を放っていた。
私達はカウンターのテーブルの中を泳ぐコバルトブルーの魚に見とれていた。

その時、背後から

「楽しんでる？」

と言う声がして振り返った。

そこに立っていたのは漫画の世界から飛び出してきたようにキレイな顔立ちをして
また、立ち姿も軽く180cmはあるスラっとした細いけどがっちりとした

見ているだけで眩しい存在感を放つ男の子だった。

誰が見ても間違いなくカッコイイとなるだろう。

私はとつさに

「はぁー」としか返せなかった。

「こんな所おったらアカンやん！

もつとこつち来て飲も♪」

私はその人に目線が釘付けになったまま沢山の男女が集まるテーブルへ移動させられていた。

私と由美の登場に男達はまるで花の蜜を吸いにきた虫のように

集まってきた。

「名前なんてゆーの？」

「どこの大学？」

「何歳？」

中にはお見合いのように

「ご趣味は？」

と聞いてくる男もいた。

由美は他の女の子を差し置いてチヤホヤする男達に
気分を良くしたのか私の分まで答えて上機嫌になっていた。

私はそれどころではなかった。
さっきの人の事で頭の中はいっぱい
で周りが目に入らない。
どの男もジャガイモに見える。

どこに行ったの？

彼の事が知りたい！

私の中でこんなにも熱く強い感情を持ったのは初めてか、
もしくははるか昔の事だ。

久しぶりの言葉にならない緊張で私の心臓はいつ破裂しても可笑しくないほど熱くなっていた。

しかし、彼の姿は消えていた。

探しに行くにも男達に囲まれて出る隙間もなかった。

仕方なく彼らの会話に合わせて聞かれるままに携帯番号を教えた。彼らとの連絡は授業中や行き帰りの電車など退屈な時間の暇つぶしに都合がいい。

1時間ほどすると門限が厳しい私は時計ばかりが気になる。

もう帰らなければ…。

でも、もう一度会いたい。

すると、店の中心で全体を見渡す彼の姿は目に飛び込んできた。私は思わず立ってしまった。

「どーしたの？」

隣の男がびっくりして私に聞いている。

私は完全にこの広い店内で彼しか見えていなかった。

彼が私にきずいて目が合った！

私はとっさに手招きした。

それを見て私の所に来てくれる彼が堪らなくカッコ良く見える。

「何？どうしたん？」

優しい口調で私に尋ねた。

「私、もう帰らないとダメなんです。」

「えっ！？マジで？」

まだ9時やで？」

「門限が厳しくて」

「そーなんやあゝ。」

「家遠いの？」

「はい」

「そつかあー！！」

家近いんやったら送ったろうと思ったんやけど

遠かったら、店抜けたんばれるからアカンわ。」

「お店の人？」

店抜けると言う言葉に反応して聞いて見る。

「俺？」

「そうそう！スタッフ」

「じゃあー駅まででいいから送ってくれる？」
私の精一杯のわがまま。

「えーよ」

「やったあ」声と心が一緒にしゃべった。

一段と盛り上がっている由美に帰る事を伝えてそつと彼と店を後にした。

店から駅までは10分とかからない。

その中で私たちはお互いの名前と歳と教え合った。

彼は私より2つ年上の大学生でさっきの店でバイトしているらしい。
1通りの紹介が終わると会話が途切れた。

その時、私は寂しくなった。
何が寂しいのか分からない。彼はこんなに近くにいるのに
切なくて堪らない。

自分でも理解できない感情が一気に私を襲って
私はパニックになりそうだった。
横断歩道が青に変わった。

黙っていた彼が
「渡んで」

そーいって振り返った彼の顔に胸の高鳴りが抑えられず
気づけば彼の腕を掴んでいた。

今日会ったばかりの男の腕にすぐ腕を絡めるなんて
軽い女って思われるよと私を止める心の天使は存在しなかった。

「えっ！？何？

恥ずかしいやん！」

びっくりしている彼の声。

でも私は恥ずかしくって彼の顔を見る事も今さら腕を解く事もでき
なかった。

それ以上、何も言わない彼。

気がつけば地下鉄の駅に着いていた。

ここで別れようと彼から離れて

「ありがとう」

と言うと

「俺も寂しがりやから下まで送るよ。」

そう言っで一緒に階段を降りてくれた。

私が寂しがりっでどーして分かったの？

そう思いながら階段を降りていると階段を踏み外した。

「大丈夫？」

とつさに強い力で引き上げてくれた。

私の心臓は彼に聞こえないか心配になるほどドキドキしていた。

改札の前まできたとき改めて私は

「ありがとう」と言った。

すると彼は

「今日の出会いが俺にとっても

雪ちゃんにとってもイイものになったらいーな♪

また、今度な！」

私が見えなくなるまで私を見送ってくれた。

この時こんな数時間で彼は私の全てになっていた。

第2話彼との時間

2週間が過ぎた。

2週間毎日、連絡をとった。
私から。

途切れ途切れの電話やメールでも私の気持ちは
日々に大きくなっていった。

家が遠い事を理由になかなか時間を作ってくれない。

「お店に来てくれたら会えるで。」

単なる客寄せに営業トークをしているように思った。
プライドの高い今までの私なら

「あつそ」
と電話を切っていたはず…。

なのに2週間目の日曜日

私は彼に会いにあの店に来ていた。

それから毎週のように通った。
他の定員の人とも仲良くなり

みんな私を慎の子と呼んでいた。
それだけでも彼のものになった気がしてとても嬉しかった。

2人きりになれるのはいつも駅までの帰り道。
この10分たらずの時間が1週間の私の支えになっていた。

「初めて見た時より可愛くなったやん！」
こんな言葉だけで私は心がキュンってなった。

「今度はいつ会える？」
私はいつも改札口の前で聞く。

「分かんわー。ごめんな。
今日、また電話する。」

彼の口癖。
でもその「ごめんな」が私は好きだった。
大抵、電話はかかってこない。

絶対ねって指きりして別れても平気で破る。
待ち疲れた私がいろんな事を考えて試行錯誤の末
電話する。

「どーしたん？」

「電話くれるってゆったのに」

「ごめん！忘れてた。」

私は彼にとってそれくらいの存在だった。

それからまた2週間経ちまた彼からの電話に待ちくたびれていつの間にか寝ていた。

朝の5時！

突然、私の携帯が鳴った。

「おっはよお」

「…」

「寝てた？」

「…」

呆れと眠気で言葉が出ない私を無視してご機嫌に話す。

「今、何時だと思ってるの？」

怒りの声で私は言った。

「ごめんな」

店が長引いて今終わってん。

終わったら雪ちゃんの声聞きたくなつて」

「本当に！すごい嬉しい」

さっきまでの怒りがどこかへ行ってしまった。

「今日、俺休みやねん。

映画でも行こか？」

夢でも見てるのかと思うほどの出来事だった。

「えっ！？

今日会えるの？嘘！

慎くん大好き。」

これが私の素直な気持ちだった。

この日、私は学校をサボった。
サボって遠い彼の最寄駅に向かっていた。

「今、どの辺り？」

20分毎くらいで彼からの着信！

いつも知らん顔のくせに勝手な人。

私はその着信に幸せを感じる。

「まだ？」

彼のせつがちが可愛い。

1時間ほどで駅に着いた。

着いたと思ったら

「ごめん。」

今日、時間あると思ってたのに2時間くらいしか無理になった。」

「えっ！」

「ごめん！」

でもすぐ2時間でも彼といれるという幸せに満たされる。

2時間ではどこにも行けず彼の家に行った。

お世辞にも綺麗とは言えない家。

彼の部屋は特に酷かったけど片付けてあげるのも嬉しかった。

綺麗になった部屋で気づけば彼は眠っていた。
彼の寝ているベットに行って顔を眺めた。

本当に作り物のように整った顔。

目にかかった前髪にそつと触れると彼は目を覚ました。

「何してるん？」

「慎くん、寝ちゃったら私する事ないもん」

「ちょっとだけ寝させて。」

と向こうむく

「嫌！」

向こうを向きそうになるのを必死で止める私。

「もう。邪魔せんという」

そついうと私を軽々持ち上げて自分の上に乗せた。

緊張のドキドキで死んでしまふんじゃないかと思った。

「何、緊張してるん？」

笑って言う彼に

「違うもん」

と言いつつ訳しようとした時

私の口は彼の口に塞がれていた。

一瞬、何が起こったか分らず

きつと私はアタフタしていたのだろう。

そんな私を下から見上げて笑っていた。

その顔があんまりカッコよくて

「私の事、忘れないでね」

本当にそう思った。

「忘れるわけないやん」

そついつて今度は長く甘いキスをした。

あんまり気持ちよくてこのまま溶けてしまいそうだった。
キスを気持ちイイと思ったのは彼が初めてだった。

彼は私は今までかかって創りあげてきた「私」というものを、どんどん壊していく…。

そして私はそんな彼にどんどん溺れていく。

第3話 私の心

3ヶ月、慎太郎との距離は少しずつ近くなっていた。
その中で彼の姿が浮き彫りになっていった。

初めは遠慮がちだった口調も3ヶ月も経つとキツクなり
メールや電話の返事は本当に彼の気まぐれになっていた。

でも私は彼の掘った穴から出られなくなっていた。
1日1通のメールや連絡が入れば幸せ！
なければ地の底に落とされた。

そんな今日のデートも突然
「今から会えるよ」

のメールからだった。

そのメールを受け取ったのは大学の講義中だった。
私はそのメールを受け取ると迷わず教室を出た。

隣の席の由美は呆れ顔だ。

2週間ぶりに乗った車は、
鼻をつく彼のキツイ香水の香りで一杯になっていた。

「これ可愛いね。」

車に飾られたミッキーのぬいぐるみを指差す。

「おう」

彼が置くはずもなかった。

「どーしたの、これ？」

精一杯の私の質問にただ

「もらってん」

と答えた。

「ふう〜ん。そっか。」

それ以上怖くて聞く事ができない。

彼がではなく、彼の口からでる言葉に私が耐えられない。

行くあてもないドライブ。

この人以外となら退屈というより他はない。

なのに私の心も体も幸せで一杯なのだ。
誰はを堪らなく好きになると行き先なんていらないのかもしれない。

彼とどこかへ行った。

何かをした。

何かを買ってもらった。

何ひとつないのに満たされる気持ち。

このまま一緒に死のうかと言われたらこの時の私なら…。

きつと

死んでいたに違いない。

こんな私を見かねて周りの友達はさまざまなコンパに私を連れ出した。

学歴・家・それに顔だって悪くない。

優しく真っ直ぐに私だけを見てくれる。

そんな人に何人も出会った。

やる気のない私に由美は進んでフォローしてくれる。

「さとし君のどこがいけないの？」

「どーみたって慎太郎よかいーじゃん」

その通りだ。

でも私にはどの人も何かがたりなかった。

由美に言われて勧められるままに何人かの人とはデートもした。

みんな何も悪くない。

みんなから私に暖かい風が吹いてくる。

なのに私の窓は決して開こうとしなかった。

ただ、彼から吹く時には雨や氷混じりの風だけをしっかりと入れていた。

ひたすら走った車はもう駅に着いていた。
「また、電話するわ。」

嘘つき！

心の中で私は叫ぶ。

「キスして」

帰り際に私は今度、彼に会うまでの魔法をかけてもらう。

「おまえ、またかよぉ」

そついいながら優しく触れる唇の感触をしっかり心に頭に焼き付ける。

「またね」

バイバイは言わない。

バイバイって言う二度と会えない気がして口にできない。

第4話 距離

今日も、彼から電話がこない。

半年たつてもまだ私は彼から抜け出せていなかった。
もう連絡がとれなくなって1週間。

さすがにこんな事が今までなかった。

私が嫌で電話に出ないのか？

着信拒否？

嫌の事だけは頭をよぎる。

このまま彼の声さえ聞けなくなったらどうしよう…。

それだけで涙が溢れた。

今までの罰なのか？

私は彼に出会うまで恋愛・結婚において私はどこか他人事で
どうでもよかった。

父と母の冷め切った関係に幼い頃から
家の中が嫌いだった。

度重なる父の暴力。
泣く母…。

他人が外から見ただけでは決して想像もつかない現状だった。
家が怖かった。

だから幼いとき
「結婚なんてするものか！」
「好きになったら負けだ！」

と思っ て生きていたのだ。

今の私は完全に負けている。

私の壁をどんどん破る彼。

その日の夜11時。
私の携帯がピンクに光った。

「もしもし！」

勢いよく電話を取る。
「おう！」

拍子抜けする慎太郎の声。

私は張り詰めたこもが切れたように泣いた。

「どうしてん!!」

驚く彼の声。

「私は一日のほとんどがシン君で出来てるの。
だから、慎君にとってはなんともない時間でも私は不安で
生きた心地がしなかった。」

「私みたいに一日中じゃなくても私の事は全然どうでもいいの?」

「私の事が慎君の頭に浮かぶ事はないの?」

私が初めて彼に自分の意見を言った気がした。
それと同時に「俺はないな。」
と私を離して欲しかった。

でも彼は時間を置いてから
「浮かぶよ。」

と言った。

離れようとしても、しても
彼から抜け出さないバカな私…。

第5話 心の隙間

人を好きになる事がこんなにも辛く苦しい事だとは思ってもみなかった。

人を好きになった事がないわけではない。
それなりに恋愛もしてきたはずだった…。

苦しく辛い時、優しいものに心が動く。

私は慎太郎への思いや悩みを例の店で仲良くなった
涼によくしていた。

涼は私より5つ年上でその店のオーナーだった。
面白く優しい涼は夜中にでも泣いて電話をかける私を
いつも励ましてくれていた。

慎太郎に出会って1年が過ぎた頃
私は慎太郎とよりも頻繁に涼と会うようになっていた。

この人は私を自由にしてくれる。
いつも私より一歩先を歩き私を引っ張ってくれた。

その頃から自然に二人の間で慎太郎の話が出る事はなくなっていた。

涼はいろんな所に私を誘い連れて行ってくれた。

慎太郎の気まぐれに振り回される私がなんとか
バランスが保てていたのも涼のおかげだ。

そんな時、由美が私にこんな事を言った。

「念のため言っておくけど

涼さんはダメだよ！」

「なんで？」

「あの人、頼まれれば誰とでもヤルらしいよ。」

「。。。」

私は由美の言葉が信じられなかった。

涼と私にはそんな関係は一度なかった。

しかし、私たちの関係は一気にみんなに広がり
いつの間にか慎太郎の耳にも入っていた。

慎太郎が言わない限り私は言う気はなかった。

自由気ままに行きたい時に行きたい所に行く人。
そんな彼に私は正直疲れていた。

好きなだけでなく意地だけだとさえ思った。

そんな涼との関係が2ヶ月を過ぎた時
私の携帯がなった。

慎太郎からだった。

「はい？」

「おう！」

「どうしたの急に」

「…」

「時間あったからさあ」

「うん」

「おまえ、涼さんと仲イイらしいな？」

「うん、」

正直に認める私。

「涼さんはイイ人やで。」

「うん。」

「実は俺あの店やめるねん。」

「えっ！！そーなんだ。」

「うん。」

だから、おまえの涼さんには会っな。」

「
…」

「だから」という意味では全然繋がらないのに
強引にこじつける。

私の中の薄れかけていた彼への思いが一気に甦る。

「うん。わかった。」

慎くんが言うならそうする。」

「よし。」

たった5分の電話で私の傾きかけた気持ちには元に戻った。

やっぱり私に魔法をかけられるのは彼しかない。

第6話 変化

私たち二人の関係にもだんだん変化が表れてきた。

私は彼の中で特別になってきたのだ。

でも、私が慎太郎の全てを独占する事はできなかった。

由美は言った。

「きつと、雪は慎にとってお気に入りの服の1つだよ。」

「どーゆーこと?」

「雪にもお気に入りの服いくつかあるでしょ?」

その中からどれかひとつ選べって言われても選べないでしょ?」

その通りだと思った。

いくら頻繁に会うようになっても帰り際不安になる。

もうこれでこの人には会えないんじゃないか……って。

そんな私も心を察するかのように彼に頼るようになった。

そして私は今まで知らなかった部分を知るようになる。

彼は人一倍寂しがりで
強がりだ

でも本当は弱くて
一人ではなんにもできない。

今まで私に見せていた姿は私たちの間に大きな壁があったのだ。

本当の姿を知った私の気持ちは一層強くなった。

この人と結婚しても私が彼を幸せにしてあげる。
そんな気持ちで一杯だった。

また連絡が取れない。

もう私は心配しない。

きつと寝てるんだろう。

携帯の電源が落ちてるんだろう。

そこに昔の私はいなかった。

慎太郎に頼られる事で私は少しずつ自立できているように思えた。

私はどんどん強くなっている。

そして彼はそんな私をどんどん好きになっていってくれると。

私が初めて家柄も学歴も関係なく心の底から好きになる事のできた人。

ほんの数ヶ月間は私の人生で味わったことのない幸せな時間だった。あまりに濃厚で熱い時間。

そんな幸せに浸りながらもきつとこの時間が長くは続かないと確信していた。

そんなときまた連絡が途絶えた。

第7話 覚悟

また始まった程度にしか思っていなかった。

しかし、今回は違った。

電話が鳴る。

「もしもし」

ちよつと不機嫌そうに私は言った。

「もしもし」

深刻そうなしつかりとした声。

「どうかしたの？」

「実はさあ……。」

「うん」

「好きな人ができたんや。」

「……。」

「おまえには嘘つきたくなって…」

「…」

「適当なヤツとかやったら適当に嘘ついて騙しとくんやけど…」

「俺、おまえにはそんな事しなくて…」

「…。」

「もしもし？聞いてる？」

「あっ！うん」
「聞いてるよぉ」

「おめでと」

「お！ありがとう」

「あゝ緊張したー
おまえが泣いたり、怒ったりしたらぐっしょり泣いて思ったけど
ゆるてよかったわ。」

「私も騙されないで教えてもらってよかった!。」

「そら、おまえは特別やもん♪」

「ごめん。ちょっと用事があつて
後でかけ直してもいい?」

「あつ、全然いい。」

「じゃ後で。」

プツ!

限界だった。

後、2秒電話をきるのが遅かったら泣いているのが
ばれていただろう。

たくさんの事が一気に頭を過ぎる。

次の瞬間、私は携帯の電源を落とし
携帯を机の引き出しに入れてしまった。

涙が止まらない。

泣きたくないのに止まらない…。

彼への思いが涙となって溢れてくる。

私は少しずつ彼から自立している。

とんでもない！！

全く自立なんてできていない。

どうしたらいいのか？

彼が欲しい。

どれくらいの時間がたったのか
気が付いた時には部屋の中は真っ暗になっていた。

結論を付けさせてくれない私の心と頭。

数日がすぎ、

携帯に電源を入れた。

そう私は覚悟を決めた。

第8話 時間と気持ち

私の心は、決して慎太郎への思いに嘘を付かせてくれない。

私は彼を好きでいる事にした。

誰にも言わずに自分こ心の中でひっそりと。

それしか方法がなかった。

彼は無神経に彼女との事をよく私に相談した。

彼女とは慎太郎より5つ年上のバツイチ子持ちの女だった。

まるでその女は慎太郎そのものだった。

そうだ！

私達は似たもの同士だったのだ。

私が慎太郎にされていた事を今度は慎太郎がその彼女にされていた。

私たちは同じものを求めていたのだ。

私はその時悟った。

私たちは決して結ばれない。

そして、慎太郎もまた、彼女と結ばれる事はないのだと。

彼は強く彼女を求め、裏切られ傷つきどんどんボロボロになってきた。

私はただ彼を励まし支えた。

どこか無責任に思えた。

結果を知ってならそー言って彼を救うべきだろう。

自分がイイ例だと。

でも私はそうはしなかった。

私と彼は似ているならなおさら

自分が傷つき気が付かなければ分からない。

それが私であり彼のやり方なのだ。

不器用なまでに純粋な「好き」と言う思い。

彼はその穴に落ちてしまった。

その光景はまさに私そのものだった。

彼が私ばかり頼るのはきつと周りの誰にも気づいてはもらえない
思いを理解してくれたのが私だけだったのであろう。

「30歳になってお互いに結婚してなかったら
結婚しよな？」

最近の彼の口癖である。

あれから2年の月日が流れていた。
私達は相変わらずたまに会っている。

でも男友達や女友達と言う単純な関係ではなく
もっと強い絆がそこにあるような気がしていた。

彼女が出来てからも私達の関係は変化していった。

私は慎太郎にとってなくてはならない存在となっていた。

しかし、私には…

第9話 彼一色

私には大きな夢が出来ていた。

大学に入って私はずっとエステサロンでアルバイトをしていた。
オーナーが母の知り合いで始めは受付を頼まれていたのだが

美容に興味を持っていた私はオーナーの薦めもあり
技術を習い最近では顧客まで持てるほどになっていた。

オーナーは私の技術を認め大学を出てから
本格的にフランスでその技術を磨かないかという提案を受けていた。

私にとって願ってもない申し入れだった。

上手くいけば日本人客ように現地に店を構えることまで
計画に入っていた。

私は日本にもう戻らないことになる。

私はその申し出を受けることにした。

慎太郎はいつものように30分の遅刻をして現れた。
「おう！」

何も変わらない。

いつものカフェで慎太郎は私に何も聞かずに注文する。

「アイスマルクティとコーヒーホットで。」

私がいつも頼むアイスマルクティ。
胸が詰まる。

「私ね」

勢いよく出た噴水のように私は話出した。

「大学卒業したら、フランス行くの。」

私に迷いはなかったのだ。

「えっ!？」

一瞬、時間が止まる。

「なんて？」

「フランスに行くの。」
強く言う。

沈黙が流れた。

「行くな」

慎太郎が私に言った。

「分かっていると思うけど俺はおまえが必要なんや。」

自然に私の目から涙が溢れた。

「ごめんね。」

私にはそれしか言えない。

これまでの人生で私は大した生き方なんてしてこなかった。
でも、ただ自分だけは厳しく生きていた。

自分が決めた事は必ず守る。
これが私が決めた掟だった。

私にとってどんなに嬉しくて
どんなに聞きたかった言葉か分からない。

でも、私が私を許さない。

家に帰っても暫らく何も手につかなかった。
数日して、出発の準備を控えて私は服の整理をした。

私の洋服入れは真っ黒だった。

慎太郎の好きな色。

彼が似合うと言ってから私は黒の服ばかり選ぶようになっていた。

彼に合わせた高めのヒール。

心理テストの本。

全てが私の好みではない。

彼が全てだった私。

第10話 卒業

フランスに発つ前日、最後に私は慎太郎に会った。

フランス行きを告げてから毎日、連絡を入れて来ていたのだ。最後まで彼は私に行くなと言った。

「俺が気づくのが遅かったのは分かってる。
でも、もう俺を好きじゃないんやな…。」

私が初めて見る表情だった。

泣きたくないのに涙が止まらない。
でも、伝えないと！

私はトイレに駆け込んで涙を拭いて
大きく深呼吸した。

もう泣かない。

私は自分と約束して席へ戻った。

「今でも、私は慎くんが好き。
きっと、その気持ちは変わらない。」

「でも…」

「私の中で慎くんが一番じゃなくなったの。」

「だから、どーする事もできないの。」

「ごめんね…。」

私たちは終わった。
彼が全てだった私。

こんなにも人を好きになれるのか？
好きになっても好きになってもまだ好きになる私の気持ち。

どうしようもなかった。
好きすぎて憎いほど彼が好き。。。

そんな私が今日、彼から離れて卒業しようとしている。

あと30分もすれば私は日本を離れる。

携帯が鳴った。

>今日のあなたの運勢は<

：

：

私が登録した占いのメール。

占いばかり信じる幼稚な慎太郎に私が毎日送っていたメールだった。

今までのさまざまの事が私の頭を過ぎる。

彼にメールを打った。

「いっぱい、ありがとう！」

送信完了と同時に携帯の電源を落とし私は日本を発った。

もう二度とあんなに強く、激しく誰かを好きになる事はないだろう。
私の中に眠る人を好きになる事の喜びも苦しみも教えてくれた彼。

私は本当に感謝の気持ちでいっぱいになった。
そして心から幸せを願っている。

私が人生で一番好きだった人が幸せになってくれないと♪

私はいつでも自分に正直に生きていく。

不器用なのかも知れないけど

いつでも私は素直な心で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8013b/>

My supple mind

2010年12月31日23時54分発行